

2009年 9月 29日

国土交通大臣 前原 誠司 様

北海道におけるサンルダム・平取ダム・当別ダムの凍結・見直し、  
および二風谷ダムの撤去検討についての要望書

北海道脱ダムをめざす会  
社) 北海道自然保護協会 会長 佐藤謙  
北海道自然保護連合 代表 寺島一男  
富川北一丁目沙流川被害者の会 代表 中村正晴  
平取ダム建設協議会 松井和男  
苫小牧の自然を守る会 代表 館崎やよい  
イテキ・ウエンダム・シサムの会 代表 佐々木義治  
自然林再生ネットワーク 代表 前田菜穂子  
下川自然を考える会 会長 千葉永二  
サンルダム建設を考える集い 代表 渋谷静男  
環境ネットワーク旭川地球村 代表 山城えり子  
大雪と石狩の自然を守る会 代表 寺島一男  
北海道の森と川を語る会代表 小野 有五  
旭川・森と川ネット21 代表 平田一三  
当別ダム周辺の環境を考える市民連絡会 代表幹事 安藤加代子

貴職におかれましては、新政権の新たな国土交通大臣として、国交省職員に対して「ダムや道路など全ての事業についての税金の使い方について、いったんリセットして考え直して欲しい」と挨拶され、9月18日の閣議後の記者会見では「2つのダムだけでなく、全国の140余りのダムなどの事業については、順次見直していきたいと思っている」と発言されております。それに基づいて、北海道内では「サンルダム、平取ダム、当別ダムを含む10箇所のダム」が見直しの対象になるとの新聞報道がなされております。貴職は、このように一連の記者会見や方針説明、ならびに八ツ場ダムでは中止方針を明確にした現地視察など、ダムに関して獅子奮迅の働きを開始されており、私たちは評価しております。

それは、いったん走り出すと止まらない公共事業には、目的・必要性・効果の観点から税金の無駄遣いとなるものが多いからであり、同時に、そのような公共事業には国民の生活を支える自然環境の破壊を伴うものが多いからです。自然環境の破壊は、事業後に膨大な修復費用を要し、経済的にも大きな負の遺産になります。そうした観点から、私たちは、現在進められているダム計画について徹底的に見直し・再検討が必要だと考えています。その意味で、貴職が進められるダムの凍結・見直しは、重要で、かつ緊急の課題だと考えます。貴職の発言に基づき、以下の2つを強く要望します。

要望1 サンプルダム、平取ダムおよび当別ダムの工事を凍結して、建設計画の見直しが行われるよう強く要望いたします。見直しにあたっては、事業見直し機関を設置するか、または河川管理者との公開討論会を行うなど、民意を反映することができる措置が必要と考えています。

要望2 二風谷ダムについて、撤去も含めて早急に解決策を検討するよう強く要望いたします。私たちの要望に関する根拠は、以下に続けて述べさせていただきます。

大臣におかれましては、たいへんご多忙とは存じますが、私たちの要望についてのお考えをお示しくださいようお願いいたします。ご回答は、約1ヶ月後の2009年10月31日までに、脱ダムをめざす会の事務局を担当している北海道自然保護協会（〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目、加森ビル6F、Tel&FAX：011-251-5465）宛に、文書によっていただけますよう、重ねてよろしくをお願いいたします。

## 1. 3つのダムに関して凍結と見直しを要望する根拠

### (1) 税金の大きな無駄遣いであること

ダムが一度建設されると、流域住民にとって害があるものとわかり、さらに重大な環境破壊を引き起こすことが判明して、ダム撤去となると、ダム建設費の約2倍の予算が必要とされること言われています。したがって、ダム建設は慎重の上にも慎重に行わなければなりません。状況となっています。

サンプルダムでは、開発局は、魚道の効果を把握、検証するとしていますが、この検証をダム建設後に行うとしていますが。魚道の効果がないときはダムを撤去するののかという問いにたいしてまったく回答していません。私たちは、まず魚道の効果の検証が先で、その結果をみてダム建設を検討するのが、税金の無駄遣いを阻止することであると主張しています。そもそも、効果がきわめて不確かであるにもかかわらず、長大な魚道を、莫大な予算を使って建設すること自体、すでに大きな問題であります。

平取ダムは、砂でうずまる二風谷ダムの二の舞となることが懸念されます。あらためて検討しなければ、大きな税金の無駄遣いとなる可能性が大きいと考えていますので、見直すべきだと考えています。

当別ダムでは、例えば札幌市は水道水が不足していないことを承知の上で、ダム建設推進の立場をとり、この財政難の中でもダム建設のために費用を支払っています。水道水などのあり方を、関係する札幌、当別、石狩および小樽の住民を交えて、税金の使い方として正しいのかどうか徹底的に論議すべきです。

また、治水面からみても、近年当別川流域では、本流で起きている洪水はなく、支流の材木川等で水が溢れたことがありましたが、その後河川改修が行われました。これらは、堤防の整備、

排水機場や小規模な遊水地など、少ない予算で十分に手当てできることです。

## (2) 民意が反映されていないこと

三つのダム計画は、それぞれ流域委員会や再評価委員会の意見に基づき進められています。これらの委員会の委員は河川管理者（北海道開発局や北海道）が選出し、委員会も河川管理者が運営して行われました。天塩川水系河川整備計画（サンルダム）は、流域委員会に提案された原案とほとんど変わらないものが策定されました。平取ダムに関連する沙流川流域委員会では、2003年の台風10号に伴う整備計画の変更を、たった2度の委員会開催で決定して、実質的審議はまったく不十分と考えられました。当別ダムの再評価委員会では、実質審議が行われませんでした。

サンルダムについては、最近まで事業主体である北海道開発局旭川開発建設部にいた職員が北大に転勤後に天塩川流域委員長をつとめ、住民・市民団体との話し合いを一貫して拒否してきました。北海道開発局が1998年に実施した流域住民5000人アンケートで、ダムが必要と回答した人は7%だったにもかかわらず、流域の自治体がすべてサンルダム推進の立場をとっており、流域委員会には、これら自治体の首長が2名も参加しています。こうしたなかで、天塩川水系河川整備計画（サンルダム）は、流域委員会に提案された原案とほとんど変わらないものが策定されました。平取ダムや当別ダムについても、下記の述べるようにさまざまな疑問がだされているのに、それらについての審議を行いませんでした。

私たちは、河川管理者により選ばれた委員の多くが河川管理者と関係のある団体とつながりがある人であること、当別ダムでは水道事業が最大の争点であったのに、座長が札幌市の諮問機関である審議会（水道部会）の部会長である人物が務めていたことが、実質審議が不十分であった要因であると考えています。さらに、委員会の運営を河川管理者が行っているため、委員会審議が不十分であったと考えています。

民主党は、マニフェストの重要な視点として脱官僚依存を掲げていて、私たちも強く支持しています。流域委員会の委員人選や運営を官僚に任せるのではなく、民意を反映したものにすることを強く要望いたします。

## (3) 自然環境保全や治水・利水に関する疑問に十分答えていないこと

### (3-1) サンルダム

全20回の流域委員会は、開発局側の一方的な説明に終始し、ようやく治水のポイントに迫る議論が行われ始めたのは17回と18回でしたが、委員長はそれを打ち切り、19回と20回の委員会でまとめて終了してしまいました。これは住民・市民側の意見を聴こうとしない、これまでの北海道開発局の委員会運営の重大な間違いであると私たちは考えています。

わずかな利水（水道水）とわずかな発電がなぜ必要なのかも明らかにされませんでした。

サンル川には北海道の重要漁業資源であるサクラマスが数千尾もに遡上しています。またサンル川は、釣り師には溪流の女王と呼ばれるヤマメ（サクラマスの子ども）の豊富な川として知られています。このため流域委員会でもサクラマス保全が重要な課題となりました。開発局は魚道によるサクラマス保全をめざす、と述べていますが、私たちの調査結果では、国内はもとより、アメリカ合衆国においても、多大な資金を投入したにもかかわらず、魚道は、サケ・マスを支障

なく遡上・降下させるにはほど遠いのが現実であることが明らかになっています。

### (3-2) 平取ダム

このダムが計画されている額平（ぬかびら）川は、岩盤が脆弱で土砂供給が多い特徴を持っています。本流の二風谷ダムではすでに多大な堆砂が進行しています。このダムも早晚、二風谷ダムと同様に堆砂で埋まってしまう危険性をもつ上に、支流のダムのため治水能力は限られたものです。さらに、平取ダムのダムサイトは、アイヌ民族にとって重要なチノミシリの聖地を含むことが、アイヌ民族による調査結果で明らかにされており、それを知りながらこの地域にダムを建設することは、アイヌ文化を無視して違法判決を受けた二風谷ダムと同じ誤りを犯すことになりかねません。

### (3-3) 当別ダム

三度にわたる事業再評価委員会で、必要水道水は 225,700m<sup>3</sup>/日から 77,800m<sup>3</sup>/日へ約 1/3 に大幅減量となりました。私たちは、水道水の必要性を主張している札幌、小樽、石狩および当別町について吟味して、ダムによらない水道水利用方法を提案しました。当別川は 1964 年に農業用の青山ダムが竣工されてから、魚が激減し魚が棲めない川になっています。当別ダムによってさらに魚の住めない川になることが懸念されます。

## 2. 二風谷ダムの撤去を求める根拠

私たちは、二風谷ダムが、裁判でアイヌ文化に配慮しなかったとして敗訴したにもかかわらず、裁判所が建設されたものは撤去するわけにはいかないと判断したことは誤りと考えています。実際に、現在の二風谷ダムは完成後 12 年の 2008 年にすでにダム貯水容量の 40%にあたる 1308 万 m<sup>3</sup>が堆砂しました。当初の有効貯水容量は、総貯水容量 3150 万 m<sup>3</sup>から当初の堆砂容量 550 万 m<sup>3</sup>を差し引いた 2600 万 m<sup>3</sup>でしたが、2008 年現在の有効貯水容量は、当初の 71%しかない 1842 万 m<sup>3</sup>に減少しています。堆砂は続いているので、有効貯水容量はさらに減少し続けて、治水ダムとしての機能を失っていきます。これはダム下流の人々にとっては危険な状況です。このダムについての今後の方針を早急に検討しなければなりません。私たちは、堤防の強化などダムによらない治水を進めて、二風谷ダムは撤去するしかないと考えに至りました。ダム撤去は極めて重大な問題であることは私たちも承知していますが、私たちは、大臣が現地を視察するなどして、二風谷ダムを今後どうしていくのか、早急に検討して結論をだすべきと考えていますので、ぜひご検討くださるよう要望いたします。

## 3. 資料

去る 2009 年 9 月 18 日に、二風谷ダム下流の日高町富川で行われた、今本博健京都大学名誉教授の講演会の要旨を資料としてつけます。私たちは、ダム問題を考える上で、この要旨は貴重なご意見と考えていますので、ぜひご参照いただけますようお願いいたします。

今本博健京都大学名誉教授：9月18日沙流川現地見学講演会要旨

「治水にもコペルニクスの発想の転換が必要だ」

- ・ いかなる洪水でも人命を損なわないことが基本である。
- ・ 計画洪水を定めても、それを超える洪水が発生すれば破綻する。
- ・ これまでの河川管理者がもっとも強く批判されるべきは堤防補強を怠ってきたことである。
- ・ ダムの効果は限定的であり、プラス面を打ち消すほどマイナス面が大きい。
- ・ 流域外に雨が集中すれば何の役にも立たない。内水氾濫にも十分対応できない。
- ・ ダム計画を理由に、長期間本来なされるべき改修が放置されるので、ダム計画が住民を危機に晒している。
- ・ 社会（水没住民）と自然環境（下流河川と海岸）に深刻な影響を与える。
- ・ 日本には新たなダム計画をつくる適地が少なくなった。
- ・ 100年に一度の洪水に対応するという事は、36000日の大部分はダムの悪影響を受け続けることを意味する。100年に一度の洪水が発生してもダム以外の方法で被害を最小限にすることに努めるべきである。
- ・ ダム以外の治水・・・堤防強化、避難対策の確立、環境に重大な影響を及ぼさない。
- ・ 住民の理解と協力を得られるダムによらない治水を検討する場の設置

## 二風谷ダム・平取ダムについて

- ・ 二風谷ダムの堆砂は急激で、現在は100年に一度の洪水ではなく、60年～70年に一度の洪水に対応できるかどうか、失敗ダムである。ダムがなくても堤防だけで60～70年に一度の洪水に対応できる。堤防を強化して破堤しないようにして、避難対策をすれば洪水に対応できる。
- ・ 二風谷ダムは撤去するしかない。予算もかなりかかるが、ダムを撤去して昔の環境が戻ることを考慮して、慎重に進めるべきだ。
- ・ 平取ダムは、支流にあり治水での貢献は大きくない。二風谷ダムと同様に堆砂が進むことが推定される。このような視点から平取ダム建設はやめるべきだ。